様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：８２４０４
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2017～2018
課題番号：１７Ｈ０７３７２

研究課題名（和文）認知行動療法的観点からの吃音の病態理解、および事例研究による効果検証

研究課題名（英文）Understanding the maintenance of stuttering-related problems from cognitive and behavioral perspectives and examination of the effects of psychological intervention using single case design

研究代表者
灰谷　知純（Haitani, Tomosumi）

国立障害者リハビリテーションセンター（研究所）・研究所　感覚機能系障害研究部・流動研究員

研究者番号：９０８０４５００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題においては、はじめに吃音のある成人の社交不安の特徴を明らかにするとともに、日常生活場面における問題の維持メカニズムに関する実証的調査を行った。社交不安の調査の結果、不安症の臨床サンプルと比べて、吃音のある成人の社交不安は発話を伴わない場面では低く、特に電話場面で高まることが示唆された。また、日常生活の調査の結果、ポジティブ感情・ネガティブ感情のそれぞれは異なる認知や行動と関連し、感情の機能を考慮した治療的介入を行う必要があると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
吃音のある成人に対して、社交不安に焦点を当てた認知行動療法が応用されつつあるが、吃音のある成人の社交不安の特徴や、認知行動療法的観点からの病態の維持に関する研究は不足していた。本研究により、吃音のある成人の社交不安の特徴を明らかにするとともに、日常生活場面における問題維持のメカニズムに関する示唆を得ることができ、吃音のある成人に対する臨床心理学的支援の発展につながりうる。

研究成果の概要（英文）：In the present study, at first, we tried to reveal the characteristics of social anxiety of adults who stutter. Then, we conducted the empirical investigation of the maintenance of the problems in the daily lives of adults who stutter. An investigation of social anxiety revealed that adults who stutter have lower social anxiety in situations not accompanying speech and have higher social anxiety in telephone situations, compared to the clinical population of anxiety disorders. An investigation of the daily lives of adults who stutter revealed that positive or negative emotions relate to different cognition or behaviors. It can suggest that it is important to conduct therapeutic interventions considering functions of negative or positive emotions.

研究分野：臨床心理学

キーワード：吃音　認知行動療法　社交不安　注意　ネガティブ感情　ポジティブ感情　経験サンプリング

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

1-1. 吃音のある成人が抱える問題と治療アプローチ

吃音症は、話し言葉の繰り返し、引き伸ばし、ブロックを中核症状とするコミュニケーションの障害であるが、吃音のある成人は発話面の問題（吃音症状）だけではなく、社交不安等の心理行動面での問題も抱えるリスクが高いことが知られている。吃音症状を緩和させることを意図した発話治療は、精神障害のない一部の吃音のある成人において長期的にも吃音症状の改善につながるが、精神障害のあるものにおいては効果を発現しにくいことが報告されている。このことから、吃音のある成人の心理行動面での問題に対しては、発話治療だけではなく、認知行動療法などの臨床心理的支援を行う必要がある。

1-2. 吃音のある成人に対する認知行動療法

吃音のある成人に対しては、発話に関連した社交不安に焦点を当てた認知行動療法に関する研究報告がなされているが、これは吃音症状の改善にはつながらないことが報告されている。一方、吃音に対する不適切な対処行動（例.「（どもるのを避けようとして）滑らかに話そうと努力する」）に焦点を当てた認知行動療法は、吃音症状の改善につながることが予備的に報告されており、認知行動療法の治療ターゲットによっては、吃音症状の改善にもつながる可能性がある。しかし、吃音への対処はどのような状況で問題になりうるかは明らかでなく、吃音症状も含めて、吃音のある成人の心理行動面の問題の維持メカニズムを実証的に明らかにする必要がある。これは、発話面の問題・心理行動面の問題の両者の改善を見据えた治療アプローチの提供にもつながる可能性がある。

２．研究の目的

(1) 吃音のある成人の社交不安の調査

これまでの吃音のない健康な成人との比較を行った研究で、吃音のある成人の社交不安は、特に発話場面で高まる一方、発話を伴わない場面では高まらないことが報告されている。このように、吃音のある成人の社交不安は場面に対する依存性があると考えられる。しかし、研究代表者が知る限り、場面の影響を考慮して、吃音のある成人の社交不安の特徴を臨床サンプルとの比較により明らかにした報告は認められない。このことから、場面別に社交不安を測定し、臨床サンプルとの比較が可能な心理尺度を用いて、吃音のある成人の社交不安の臨床症状の特徴を明らかにすることを本研究の第一の目的とした（図 1）。

(2) 吃音のある成人の日常生活における問題維持のメカニズムに関する調査

吃音のある成人に対しては、社交不安等のネガティブ感情を伴う側面の緩和に焦点を当てた認知行動療法についての報告がなされており、不適切な対処行動はネガティブ感情と関連すると考えられる。一方で、ポジティブ感情を伴う認知や行動はネガティブ感情を伴う認知や行動と拮抗すると考えられるため、ポジティブ感情が問題の維持において果たす役割についても調べることとした。ネガティブ/ポジティブ感情と、不適切な対処行動を含む認知行動療法で介入可能な要因（例.「吃音に注意が向いてしまう」「コミュニケーションに集中できない」）、及び、吃音のある成人に対する支援でアウトカムとなりうる要因（吃音症状やコミュニケーションの満足度）との間の関連を、日常生活の文脈の中で調べることで、感情価の影響を考慮した問題維持のメカニズムに関する臨床的示唆を得ることを第二の目的とした（図 1）。

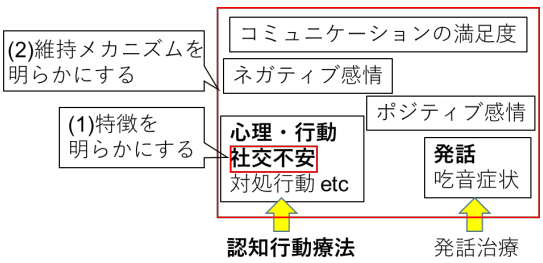

図 1. 本研究のコンセプト図

３．研究の方法

(1) 吃音のある成人の社交不安の調査

【対象者】国立障害者リハビリテーションセンター病院の成人吃音相談外来を受診した 328 名（女性 55 名、男性 273 名；18～66 歳、平均年齢 29.30 歳（*SD*＝9.40））を分析の対象とした。

【尺度】自己報告版 Liebowitz 社交不安尺度日本語版（LSAS-J）の恐怖の下位尺度を用いた。LSAS(-J)では、24 の様々な社交場面における恐怖感/不安感と回避の程度を評定する。初診時の LSAS-J の回答を分析に用いた。

【データ分析】

1．確認的因子分析

不安症のある人を対象とした先行研究で支持されていた LSAS の因子構造（Safren の 4 因子モデル）が、吃音のある成人においても支持されるかどうかを検証した。

2．探索的因子分析

Safren の 4 因子モデルが吃音のある成人では支持されなかった場合、吃音のある成人におけ

る LSAS の因子構造を調べた。
3．因子得点の推定値の予備的比較
　2.の探索的因子分析により得られた LSAS の因子構造に基づき、吃音のある成人の社交不安の強さを、先行研究で報告されている不安症のある臨床サンプルと比較した。

(2) 吃音のある成人の日常生活における問題維持のメカニズムに関する調査
【研究参加者】自助団体・機縁法・研究所 HP を介して募集した吃音のある成人 27 名（女性 5 名、男性 22 名：20～47 歳、平均 27.04 歳（*SD* = 6.61））を対象とした。
【手続き】
1 日目：参加者に対して、質問紙への回答、吃音検査、経験サンプリング法（日常生活での即自的回答データを収集する手法）についての説明を行った。
2～15 日目：日常生活の中で参加者の所有するスマートフォンを用いて経験サンプリング法を行い、計 98 回、発話を伴う社交場面におけるネガティブ/ポジティブ感情、認知や行動、吃音症状やコミュニケーションの満足度について尋ねる機会を設定した。
【データ分析】
　個人内での状態的関連（レベル 1）、個人間での特性的関連（レベル 2）を区別した分析を行った。レベル 1 については、各測定値の個人内での平均値からの偏差、レベル 2 については、個人内での平均値を分析に用いた（図 2）。

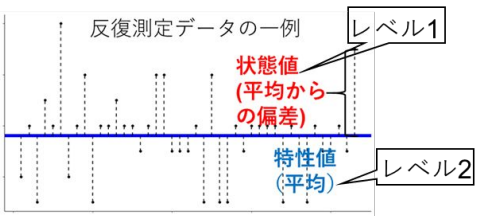

図 2. 状態と特性の区別

1．個人内での状態的関連
　測定した 15 個の要因のそれぞれが互いにどのように関連しているかを明らかにするため、要因間の直接的な関連をネットワークモデルとして可視化し、因子分析によるクラスタリングを行った。
2．個人間での特性的関連
　質問紙得点、及び日常生活での回答の平均得点との間で順位相関分析を行った。

４．研究成果

(1) 吃音のある成人の社交不安の調査
1．確認的因子分析
　先行研究で支持されていた LSAS の因子構造は、吃音のある成人においては支持されなかった。
2．探索的因子分析
　因子 1「会話なし・自己主張」、因子 2「人前での話」、因子 3「飲食・パーティー」、因子 4「知らない人との交流」、因子 5「電話」の 5 つの因子が抽出された。
3．因子得点の推定値の予備的比較
　不安症のある臨床サンプルと比べて、因子 1「会話なし・自己主張」場面での不安は低く、因子 5「電話」場面での不安が高い可能性があることが分かった（図 3）。

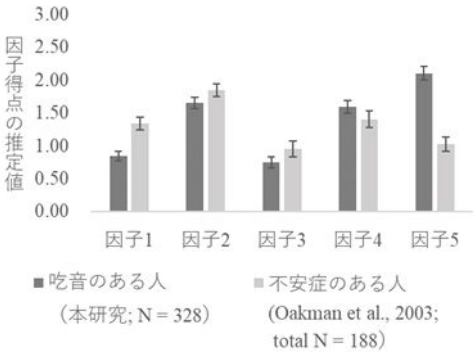

図 3. 吃音のある成人と不安症のある人の社交不安の比較

　本研究は、吃音のある成人の社交不安の臨床症状の特徴は、（吃音のない）不安症の臨床サンプルとは異なることを定量的に示した点で意義がある。今後は、社交不安の維持要因（他の人から否定的な評価を受けることを懸念するなど）と社交不安の臨床症状との間の関連を調べ、維持メカニズムが不安症のある臨床サンプルとは異なるかどうかを明らかにする必要があると考えられる。

(2) 吃音のある成人の日常生活における問題維持のメカニズムに関する調査
1．個人内での状態的関連（図 4）
　測定した 15 の要因は、大きく「ポジティブなコミュニケーション」「ネガティブ感情」「吃音への対処」に分類され、後 2 者は強く関連すると考えられた。また、ポジティブ感情はコミュニケーションに対する集中と関連することが示唆され、ネガティブ/ポジティブ感情のそれぞれは、異なる認知や行動と関連すると考えられた。さらに、吃音症状には吃音に注意が奪われることが、コミュニケーションの満足度にはコミュニケーションに集中することが最も強く関連し、吃音に注意が奪われることと、コミュニケーションに集中することとの間には弱い関連しか認められないことが示唆された。

2．個人間での特性的関連
　状態的関連と同様に、ネガティブ感情は吃音に対する注意と、ポジティブ感情はコミュニケ

ーションに対する集中と強く関連し、吃音に対する注意は吃音症状と、コミュニケーションへの集中はコミュニケーションの満足度と強く関連した。さらに、社交不安は吃音に対する注意などを含む吃音への対処の強さと関連し、特性不安はコミュニケーションへの集中の低さと関連する傾向にあった。

研究代表者が知る限り、本研究は、吃音のある成人におけるポジティブ感情・ネガティブ感情の機能の差異を定量的に示した初めてのものである。ネガティブ感情・ポジティブ感情はそれぞれ異なるメカニズムで問題の維持やコミュニケーションの満足度の低下に寄与していると考えられ、ネガティブ感情・ポジティブ感情のそれぞれに着目しながら治療的介入を行うことが有効であると考えられる。

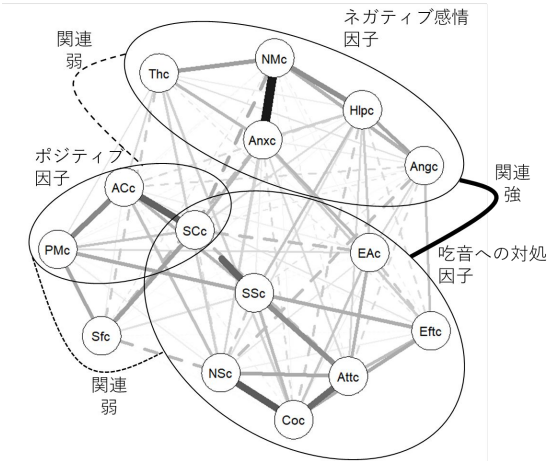

図 4. レベル 1 でのネットワークモデル

注 1) Th: 否定的評価懸念、Sf: 安心感、PM: ポジティブ感情、NM: ネガティブ感情、Anx: 不安、Ang: 怒り、Hlp: 無力感、SS: 自覚的吃音症状、EA: 感情抑圧、Att: 吃音に対する注意バイアス、Co: 吃音に対する対処、NS: 吃音に対する回避的認知、Eft: 発話努力、AC: コミュニケーションへの集中、SC: コミュニケーションの満足度

注 2) 実線は正の関連、破線は負の関連を意味し、関連が強いほど太く濃い線で表される

注 3) 末尾の”c”は、個人内での状態値であることを表す

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計　3　件）

1. 灰谷 知純・酒井 奈緒美・森 浩一・北條 具仁（2018）．成人吃音相談外来受診者におけるLiebowitz社交不安尺度の因子構造 第63回日本音声言語医学会総会・学術講演会，123，久留米，10月，口頭発表．
2. 灰谷 知純・酒井 奈緒美・森 浩一・北條 具仁（2018）．吃音のある成人のLiebowitz社交不安尺度の恐怖の下位尺度に対する探索的bifactor分析 日本心理学会第82回大会，3AM-043，仙台，9月，ポスター発表．
3. Tomosumi Haitani, Naomi Sakai, Koichi Mori, Tomohito Hojyo, & A-Rong-Na Hohchahar. (2018). The factor structure of the Japanese version of Liebowitz Social Anxiety Scale in people who stutter. One World, Many Voices: Science and Community, No. 464, Hiroshima, July, Poster presentation.

６．研究組織

(1)研究分担者
なし

(2)研究協力者
研究協力者氏名：森 浩一、酒井 奈緒美、阿栄娜、北條 具仁
ローマ字氏名：Mori Koichi, Sakai Naomi, A Rongna, Houjou Tomohito

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。